

『法華經』における仏教福祉の思想

吉 村 彰 史

一 序言

釈尊の説いた教え (dharma・理法) は、語源的には「保つべきもの」、すなわち、人が人として保つべき普遍的な真理といえる。その原理は「縁起」思想であり、これは生きとし生けるものの相互関係性や相互変化性に注目する視点である。そして、理法を実践し、実現しようという立場に立つとき、自己を内省し他者への感謝や尊敬の念を抱くことを通して、「自他ともに傷つけない、他を思いやるあたたかいところ」を持つて他者と関わる姿勢が導かれる。筆者は仏教の説く理法とは「他のためにはかるころ」であると考え、また仏教福祉を「理法を実践しその実現を目指し、自他共に人間としての成長を目指す営み」と捉え、以下の論を進める。

さて、森永松信博士は、『法華經』の福祉理念について、この法華經は、要約していえば、人間の福祉探求の場を広く地上の社会生活に求め、それを活動の本来の場所として、人類の福祉

実現のために、聖なる「行」を展開する人間像を描いたものといえよう。しかも、それはこのような人間像のあり方を、主体的には個人の人格的視点より、客観的には人間関係の社会生活的視点より、その両面において説明している。

と述べ、さらに、譬喩や因縁等の「類まれな文学的構成と表現」によつて、人類の福祉の実現を目指す理想的人間像が説き示されている⁽¹⁾としている。

『法華經』(鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』による)第二章「方便品」から第九章「授学無学人記品」で説かれる「一乗」の思想や、第十章「法師品」で説かれる「願生」の思想は、「人間は本来、自他共に人格の向上や社会の平安を求める『菩薩』である」という人間観を示すものである⁽²⁾。また、「法師品」以降に説かれる種々の菩薩行も、仏教福祉の実践を支える思想として重要である。しかし、『法華經』の「文学的構成と表現」に注目するとき、「虚空会」すなわち第十一章「見宝塔品」から第二十二章「嘱累品」において象徴的に説かれる内容は特

に重要である。そこで本稿では「虚空会」の説法を中心に取り上げ、仏教福祉の思想として注目される点を整理し、それらの現代的意義を「共生」との関連から考察する。

二 「虚空会」の象徴性

「見宝塔品」以降において、「虚空」(antarka)とは、現象世界のさまざまな区別がなくなり、時間や空間を超越した境地を象徴する場であると理解される⁽³⁾。また第十五章「從地湧出品」で出現する地涌の菩薩は、現実世界に続々と菩薩として生まれ、理法の継承者として実践してゆく人々を象徴していると理解される⁽⁴⁾。そして第二十一章「如来神力品」・第二十二章「嘱累品」における理法の付嘱は、理法の実践と実現は現実世界に生きる人間一人ひとりに委ねられているという自覚や使命感を強く促すものである。特に「即是道場」⁽⁵⁾の語が示すように、「虚空会」の説法は単に空中や現実世界を離れ超越した場所ということではなく、理法の実践とその実現は現実世界のどのような場所においても、どのような対象に対して開かれていることを象徴的に示しているのである。

三 他者との関わり

第十二章「提婆達多品」前半では、釈尊は提婆達多を「善

知識」(kalyāṇa-mitra・善き友)と捉える。自分に敵対し、直接に害を与えるような存在であったとしても、「善き友」として捉え積極的に「恩」を感じる人間観は、仏教福祉における他者理解のあり方の一つとして注目される⁽⁶⁾。また後半では龍女の成仏が説かれるが、龍女が八歳の子どもである点及び畜生(動物)の身であるという点に着目すれば、「提婆達多品」の教説は、人間だけでなく動物も含めた、あらゆる生きものの本質的平等性や尊厳性を示すものとしても理解できる。

第十三章「勸持品」・第十四章「安樂行品」では、他者との関わりのあり方がさまざまに説かれる。「勸持品」では侮辱する・刀杖を振り回す・慢心を抱いている・名聞利養に貪著している・他者を誹謗し吹聴する等といった者たちが挙げられているが、こうした者たちに対してはあくまでもそれを忍受する態度が強調される。「安樂行品」で説かれる四安樂行は、柔和忍辱の心を持ち、空の立場から相手を分別しない身の振る舞い・口の慎み・心のあり方、及び慈悲の心をもつて接し、理法の実践へと人を導こうという誓願である。

第十九章「法師功德品」で説かれる「六根清淨」は、偏見を離れ生きとし生けるものの関係やつながりを把握すること・さまざまな声に耳を傾けること・相手の願望を知り、相手の心に触れる言葉によって喜ばせること・好ましい姿に自己を整えること・世俗的な言説であっても理法を実践する立

『法華經』における仏教福祉の思想（吉村）

場から止揚する等といった内容である。以上はいずれも他者との望ましい関わり方を示すものとして重要である。

四 「悲しみ」と「喜び」

第十六章「如来寿量品」において、釈尊は久遠の寿命を持つにも関わらず、自らの涅槃（死）を示すと説く。「良医治子の喩」において、父は解毒剤を与えようとしても、正気を失った子どもはそれを受け入れようとしなない。しかし、「常に悲感を抱いて、心遂に醒悟せり」とあるように、父の死という大きな「悲しみ」によって、良薬（理法）に対する気付きや信頼を得させるのである。確かに、「死」は深い悲しみや恐怖を伴うものである。しかし、釈尊の涅槃（死）は、現実の苦に悩む人々を理法へと気付けさせるための方便（手段）として描かれている。すなわち、「悲しみ」を通して自己の「生」のあり方に気づきを与えるという視点を提供しているのである。

第十七章「分別功德品」では四信・五品が説かれるが、それらの第一は「一念信解」および「随喜」である。また第十八章「随喜功德品」では五十展転随喜の功德が説かれる。「随喜（anumodana・共に喜ぶこと）」は、理法や自己の「生」のあり方に気づくことによる「喜び」や、そうした「喜び」を分かち合うという他者との関わりを示すものとも理解できる。

また、「嘱累品」で理法の付嘱の場面で説かれる「示教利喜⁽⁸⁾」は、自らが理法を実践し、次第に教えて理解を深め、共に成長しながら「喜び」を共有して行く、という方法論の説示でもある。

五 「増上慢」再考—自己の内省と「共生」

寺田貴美代博士は共生概念をめぐる先行研究の共通点として、「共生そのものよりも『共生化』あるいは『共生への志向』とでも言うべき理論が目立つ」こと、共生は「異なる者同士が相互に変容し合い、新たな関係を築く、ダイナミックな過程および現象である」こと、「各自の内面的な領域での変容をも内包する過程である」こと等を指摘した上で、共生は「全ての人々が持つ、それぞれの他者性としての異質性を理解し、尊重することが重要」で、そうした「相互理解と尊重に基づき、自—他の関係を再構築する営みである」と述べている。⁽⁹⁾

『法華經』には、増上慢や敵対する者たちの姿が随所に描かれている。そこで、そうした者たちを、相互理解・相互の尊重が困難である相手の事例として捉えたとき、第二十章「常不輕菩薩品」で説かれる「但行礼拝」は、共生の実現に資する自他関係の再構築において有益な示唆を与えると筆者は考える。この「礼拝行」は、あらゆる人々の中に成長・向上の可能性があることを人間の本質として尊重する姿勢と理解さ

れているが、⁽¹⁰⁾それだけでなく、「増上慢」等の存在に対して、「慢心を抱くものさえも傷つけない」、あるいは「理法に気付く、理法を求める心が起こるのを待つ」という姿勢を示すものである。さらに、こうした者たちを第三者的に理解するのではなく、自己の内省を促すものとして読むならば、こうした教説は、相手を「慢心を抱くもの」と見ることで自体に対する反省を促し、『法華経』を受持する者自身が潜在的に持つ慢心を離れるべきことを示すものとも理解できよう。

また、「常不輕菩薩品」は理法の付嘱の直前に置かれていることから、但行礼拝は『法華経』「虚空会」に示される種々の菩薩行を集約するものであり、人間の本質を尊重し「自他ともに傷つけない」という理法の実践のあり方を、「相手を積極的に敬う」という行動によって示したものと理解できるのである。

六 結語

『法華経』には、あらゆるものを「気づき」を促すものとして積極的に捉え、他者の痛みや悲しみを感じ取り、忍耐強く寄り添い、喜びを共有してゆくというあり方が示されている。就中、「共生」を実現するための要件としては、「共に敬うこと」・「共に喜ぶこと」が提示できよう。しかし、これは他者に求めるのではなく、まず自ら実践していくことが

要請されている点に留意すべきである。これが、『法華経』における仏教福祉の理念と理解することができるのである。

- 1 森永松信『仏教社会福祉学』誠信書房、一九六四年、一三〇—一三一頁。
- 2 この点に関しては、別の機会に詳しく論じたい。
- 3 紀野一義『法華経の探求』平楽寺書店、一九六二年、一八七—二二二頁、二三八—二四七頁。横超慧日『法華思想』平楽寺書店、一九六九年、九一—九四頁。三友量順『ブツダの国の法華経』一九九九年、日蓮宗新聞社、一一九—一二五頁。望月海淑『法華経における虚空の理解』『渡邊寶陽先生古稀記念論文集・法華仏教文化史論叢』平楽寺書店、二〇〇三年、一七五—一九五頁。
- 4 田村芳朗『法華経—真理・生命・実践』中央公論社、一九六四年、五二—五四頁。森永松信『社会福祉と仏教』誠信書房、一九七五年、三〇六—三一六頁。望月海淑、前掲論文、一九三—一九四頁。三友量順、前掲著、一四九—一五八頁。
- 5 大正蔵九、五二上。
- 6 拙稿「日蓮の他者理解について—仏教福祉の視点から—」『印度学仏教学研究』五九卷一号（通号一二二号）、二〇一〇年、五四—五七頁。
- 7 大正蔵九、四三中。
- 8 大正蔵九、五二下。
- 9 寺田貴美代『共生社会とマイノリティへの支援—日本人ムスリマの社会的対応から—』東信堂、二〇〇三年、二一—五六頁。
- 10 清水海隆『仏教福祉の思想と展開に関する研究』大東出版、二〇〇二年、一三四頁。

〈キーワード〉 仏教福祉、共生、随喜、増上慢、常不輕菩薩

（立正大学大学院）

『法華経』における仏教福祉の思想（吉村）